

Webによる授業改善アンケート 生命医科学科としての取り組み



生命医科学科 教授
下方 薫



生命医科学科 准教授
浅野治彦

今年度導入された「Webによる授業改善アンケート・授業評価システム」を活用して、生命医科学科では、学科を挙げて授業改善アンケートを行うことになった。

事の発端はFD活動を生命医科学科としてどのように評価するかというFD委員会での議論であった。学生による授業評価の必要性が考慮され、「魅力ある授業づくりのために」と題されたWebによる授業改善アンケートを教員各自が行い、その結果をFD活動の評価点に反映させることになったのである。具体的にはFD活動の評価点の10%、つまり10点を授業改善アンケートに当てる。うち、5点はアンケートを行ったということに対して自動的に付与し、アンケートの結果は残りの5点に反映させるというものである。当然のことながら公平性を保つために、共通のアンケートを用意する必要が生じた。しかし点数化が可能なアンケート作成は少々難問で、例えば「講義スピードはどうであったか？」という設問では、①遅すぎ②遅い③ちょうど良い④速い⑤速すぎの選択肢がまず思い浮かぶ。③に近いほど良い評価で、結果が分かりやすいが、

FDの点数化を考えると(点数が高い) = (評価が高い)とならず、集計がややこしくなる。そこで、遅いか速いかは自分で考えてもらうこととして、①適切である②だいたい適切③普通④あまり適切でない⑤適切でない、という選択肢とした。①を5点⑤を1点とすることで集計は容易となる。さてアンケートの設問であるがFD委員の意見を聞きながら10個用意した。これは、「魅力ある授業づくりのために」ではアンケート1つにつき5個の設問が可能であることと、FDの評価点となる5点の集計が容易なようにとの理由に基づいている。講義に関しては1)難易度、2)量、3)スピード、4)学生の理解度、5)シラバスとの一致度、講義の様子に関しては1)声の大きさ、2)言葉の明瞭さ、3)理解を助けるための工夫、4)静粛さ、5)90分の活用、が実際の設問内容である。手前みそながら、これらはいずれも次回の授業づくりに大変示唆的であると思っている。設問の詳細は中部大学ホームページの「魅力ある授業づくりのために」をクリックし「授業改善アンケートを新規に設定」→「設問一覧を表示」と進み8001～8010番をご覧

ください。

生命医科学科では、このようにしてできあがったアンケートを形の上下ではFD評価のために、理想的には各教員が授業の質を高めるために行うこととなった。すでに行った先生からは、アンケートは簡単でやりやすいとの声を聞いている。一方で「コンピュータはどうも…印刷してやりました」という先生もいた。「Webによる授業改善アンケート・授業評価システム」は必ずしも身近なものとはなっていないようだ。しかし問題はむしろアンケートにどれだけの学生が答えてくれるか、にあると思う。8～9割の回答率という先生もあれば4割程度という先生もあった。この回答率を今後も維持あるいはさらにアップさせるためにはどうしたらよいか？授業中にアンケートについて学生にしっかり説明し回答を依頼するのは当然である。「アンケートに答えないと期末試験を受けさせません」と言ってもいいかもしれない。8～9割の回答率はこの言葉から生まれたらしい。アンケートは匿名であるので、それがちょっと刺激的な冗談であることは学生にすぐに分かったらしい(本当に使われる先生は十分注意してください)。アンケートを、学期末に行うのではなく、授業期間中に「ちょっと皆さんの意見を聞きたいから」くらいの感覚で行ってみたいはどうだろうか。授業期間中であれば現在受講中の学生に授業改善の恩恵が及ぶ可能性が高い。その点をアピールすれば学生から高い回答率を引き出せると思う。授業改善アンケートには自由記載欄もあるので、設問以外の有益なコメントが学生からあれば、まさに学生とともに授業を作っていくという理想形に近づくのではないだろうか。

この報告が読者諸先生の授業改善の取り組みに少しでも寄与するところとなれば望外の喜びである。

自転車乗りのしあわせ

コミュニケーション学科 教授 都築耕生



この数年、折り
あれば自転車
で通勤している。
週の半分くらいは、
高蔵寺ニュータウン
から大学まで、気
に入りのルートで

往復十数キロ、合わせて数十分を走る。さわやかな風を全身に受けてペダルを回す時間は、溜まるばかりのストレスから解放される至福の時である。自転車通勤をride to work というらしいが、こうなると、work to ride の心である。

坂道がつかないかとよく聞かれる。確かに、当初は覚悟の要る「挑戦」であった。松本跨道橋を上がり、守衛さんの前を息が切れているのを隠し拳手で通過したときは、ヒーローインタビューを受けたいくらいの「偉業」を成し遂げた気持ちだった。

しかし、うれしいことに1カ月もすると、坂道を求めている感覚が体に生まれた。低いギアで負荷を軽くしてゆっくりと登ることに心地よさを感じるようになったのである。サイクリストの世界に、「坂道マニア」なる言葉がある。そんな人の気持ちが少しだけわかるようになった。

もう一つの発見は有酸素運動の効果を実感したことである。息切れしないゆったりした乗り方を一週間ほど心がけてみた。すると体重、体脂肪ともに明らかに数値が低下した。高校生に抜かれるものかと、つい息を切らすような走り方をするが、それは減量等には逆効果だとわかったのである。のんびり走った方が体調もよい。これは実に福音ではないか。

さて、昨今の原油価格の高騰で、自転車通勤が脚光を浴びている。本当に

エコかどうかは武田邦彦先生にお任せするとして、家計への節約効果は疑問だ。私の体の「燃費」は、車ほどよくない。口が渇くので水ボトルを1、2本購入するだけでガソリン代くらいになるし、食欲も増進する。洗濯物も増えた。

事故の可能性もある。先日もコーナーでスピードを出しすぎ、わが身も物理の法則を免れないことを学んだ。熱いアスファルトにうつ伏せのまま、数日後の期末テスト実施のことを思った。幸い、やや深手の擦り傷ですんだが、忙しい時期に入院でもしたら、タダではすまなかったと冷や汗をかいた。それでも私が自転車を「転がす」のは、風を軽やかに切る爽快感が故のことである。



定光寺自然休養林展望台にて

会計を通して企業を見る目を養う

経営情報学科 准教授
阿部 仁



会計はビジネスの言語と言われる。企業活動の成果は会計のプロセスを経て、財務諸表とよばれる貸借対照表、損益計

算書などの計算書類にまとめられる。私は会計のルールである会計基準の国際的統一に関する諸問題を研究しており、専門科目「国際会計論」でその内容を講義しているが、会計の仕組みを初歩から学ぶ必修科目「入門簿記」、「簿記原理」も担当している。特に「入門簿記」は経営情報学部に入学者が会計に初めて接する科目であり「会計を好きになっても

らいたい！」と願いながら授業にのぞんでいる。

「入門簿記」の授業では、レジュメと板書を中心に60分を講義にあてている。多種多様な企業取引をどのように会計のプロセスにインプットするか、事例を用いながら学んでいく。学生生活の中ではおそらく遭遇することのない取引事例をもとに、その記帳や処理方法を学ぶため、専門用語が難しいという意見も多い。「当座預金」、「受取手形」、「売掛金」、「買掛金」なんていわれてもピンとこなくても無理はない。理解とともに少し暗記も必要になる。「社会に出たらきっと役に立つから」と訴え続けている。

簿記は理解とともに問題を解くことが重要な分野であるため、残りの

30分は講義で話した内容を理解しているか、毎回、演習問題を解いてもらい提出を求めている。提出物は次の授業までに採点し、返却することをモットーとしているが、これがなかなか大変。授業の合間や、電車の待ち時間など、短い時間を利用して赤ペンを走らせている。返却された答案の点数に一喜一憂する学生の表情を見ていると、今週も間に合ったという安堵感とともに苦勞も吹っ飛んでしまうように感じる。

ただ演習問題は非常によくできているのに試験の点数がさえない学生が少なからずいる。相互扶助(?)の精神も大切だが、社会に出てから困らないように自身を磨く努力を怠らないでほしい。

私の授業づくり 